

え〜とこだより



ここにあるすべてを、
かけがえのない「宝もん」へ。

保田・八幡宮(現:阿賀野市保田)の祭礼(提供:熊倉猛氏)

もくじ

- 2 ロバダン！特集
- 4 「阿賀野川と共に生きたあの頃とこれから」
- 4 阿賀野川流域ロバダン！マップ
- 4 ロバダンを通してわかった率直な本音
- 4 阿賀野川中流域の地場産業ツアー
- 4 ★体験レポート！大地との絆を紡ぐ
- 6 連載コラム
- 8 ●映画「阿賀に生きる」とその周辺の人々
- 8 ●それぞれの新潟水俣病
- 8 インフォメーション

昭和40年代、新潟水俣病の発生は、 曲がり角を迎えた時代の象徴だった。

阿賀野川と共に生きてきた
流域が、どう変わってしまっ
今後どう生きていくか。

少人数で寄り合い、本音を深く語り合う「ロバダン！」(炉端談義)。これまで2年以上、阿賀野川流域各地で、様々な方々と話し合いを重ねてきました。今号では、昨年度の開催状況とこれまでの総括をお伝えする中から、新潟水俣病を乗り越える流域のあり方へのヒントを模索します。

多くの方々の本音を伺って最も印象的だったのは、新潟水俣病に対する想いや感じ方は様々なのに、どの方も共通して、「疲弊した流域の現状を深く憂えている」ということでした。

新潟水俣病の発生が確認された昭和40年代、時代は曲がり角を迎えていました。その後日本は低成長の時代に突入し、長い停滞に苦しむ現在に至ります。その現状を何とか打破しようと試行錯誤する「中流域の地場産業の方々の取組を通して、流域に暮らす皆さんと共に過去を見つめ直し、流域の未来について考えを深めていければ幸いです。

シリーズ 地域再発見講座 阿賀野川ものがたり 第7回 阿賀野川と共に生きたあの頃 ～風土と歴史が織りなす光と影～

草水石、安田瓦、川砂利、酪農、船頭、漁業…
かつて、阿賀野川中流域では、その独特の風土と歴史が生み出した、特色ある地場産業が盛んだった。しかし、昭和40年代、新潟水俣病の発生を境に、「人と人の絆」や「人と自然の関係」が失われ、流域も低迷し始める。そして現在、地域の未来を切り拓くために、地場産業が様々な試みを模索する中…
あの頃の光と影を見つめ直し、流域の未来へどうつなげていくか。



(提供:熊倉猛氏)



(撮影:村上孟氏)



(提供:(有)小田製陶所)

日時●平成23年10月29日(土)10時～12時(※ツアー参加の場合昼食をはさみ15時まで)

場所●阿賀野市安田公民館大集会室(阿賀野市保田4807-1)

第1部:事務局プレゼンテーション「阿賀野川中流域の風土と地場産業の歴史」

第2部:地元プレゼンテーション「未来に向かって～持続可能な取組を考える」

～(有)小田製陶所、丸三安田瓦工業(株)、五泉市咲花温泉観光協会、神田酪農など

〔 ツアー参加者のみ昼食

第3部:窯業と酪農を巡るツアー／※先着30名、15名ずつ2班に分かれ移動 〕

定員●70名(※先着順、定員を超えた場合はご連絡いたします)

参加料●講座参加:無料、ツアー参加:1000円(昼食代) 申込締切●10月26日(水)

お問合せ●阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業事務局(TEL&FAX0250-68-5424)

水俣病被害者の方への 給付申請を受付

「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法」に基づき、給付の申請を受け付けています。

対象者/次のいずれも満たす方

- ①昭和40年12月31日以前に阿賀野川でメチル水銀に汚染された魚などをたくさん食べたと認められる方
- ②一定の感覚障害が認められる方

給付内容/一時金、療養手当、医療費の自己負担分

※亡くなられた方についても、水俣病認定申請等の公的な診断による資料がある場合は、申請することができます。

詳しくは新潟県生活衛生課 TEL.025-280-5204 まで

「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」とは？

正式には「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」(通称FM事業)と言い、阿賀野川流域の各地域が今も続く新潟水俣病と向き合い、それを乗り越えるような「人と人の絆」や「人と自然の関係」を紡ぎ直すため、流域の住民・行政・民間団体が手を取り合い、「新しい地域づくり」を目指して始まったプロジェクトです。

阿賀野川え〜とこだ! 憲章(事業理念)

私たちは新潟水俣病に学び教訓を伝承することで、負の遺産から新たな価値を創造していくことを目指します。阿賀野川流域の宝物を広く内外に発信しながら、公害により失われた人と人、人と自然、人と社会の絆をつむぎ直していきます。地域を愛する人が地域の未来をつくる「流域自治」の確立へ向けて行動します。

(阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業推進委員会)

編集後記

第5号はいかがでしたでしょうか？
これまでの特集は上流域に偏りがちでしたが、今号からしばらく中流域をメインに取り上げます。知ってほしいそうで知らない中流域。実は、職人の町・安田や五泉の咲花温泉などでは、地域のこれからの切り拓こうとする様々な試みを始動させています。

FM事業でも、中流域の地場産業をテーマに、地元関係者の方々にもご参加いただき、地域再発見講座を開催します! その後、パネル巡回展も開催予定です。地元にお住まいの方もそうでない方もぜひご参加いただき、地域の歴史を見つめ直し、これからの地域のあり方を考えるきっかけとしていただければ幸いです!

第6号も引き続き中流域の地場産業を特集予定です。ご期待ください!

阿賀野川え〜とこだより 第5号

発行:新潟県(2011年10月13日)

企画編集:阿賀野川え〜とこだプロジェクト(事務局/〒959-2221 阿賀野市保田3866-1)

TEL.&FAX.0250-68-5424

aganogawa@niigata.email.ne.jp

「阿賀野川え〜とこだ! ブログ」

<http://www.aganogawa.info/>

リニューアルまであともう少し…。





阿賀野川と共に生きた あの頃とこれから

新潟水俣病に向き合い、それを乗り越える流域づくりを目指して始まった「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」(FM事業)。「ロバダン!」を通じて見えてきた、様々な立場の方々の率直な本音をお伝えする中から、流域の過去をどう見つめ直し、これからどう進むべきか、皆さんと共に考えていきます。



そもそも「ロバダン!」って何?

流域の茶菓子を楽しむくつろいだ雰囲気の中、新潟水俣病のことだけでなく、昔の流域の思い出や、地域が抱える現在の問題、これからの流域のあり方など…様々な話題を本音で語り合う少人数の寄り合いです。「炉端談義」を略して「ロバダン!」。



事業説明:10分



作品鑑賞:15分



フリートーク:1時間30分



レポート

ロバダン!を通して分かった率直な本音

「ロバダン!」は平成22年度末時点で計34回の開催を数え、現在も流域各地で展開しています。その基本的な考え方は「重要なことは少人数で顔と顔を合わせて、本音で話し合うこと」そのおかげで、和やかな雰囲気の中でも、様々な本音や地域の実情が浮かび上がってきました。今回は、この2年間に寄せられた印象的なご意見をもとに、「ロバダン!」を振り返ります。

新潟水俣病の現状認識

「新潟水俣病の原因は農薬水銀であり、昭和電工はあまり関係ないと誤解していた」
「若い私たちは、水俣病自体も、地元で問題になっていないことも、ほとんど知らない」

なぜ距離を置いたのか

「公害発生当初、様々な人々が地域に入り込んできたため、距離を置くようになった」
「影の側面に偏った報道が多すぎる。せめて光の側面も併せて伝えてほしい」

流域では、新潟水俣病の問題から距離を置く人が多いと感じました。若い世代は最近の裁判も含めて過去を知らず風化が進んでいます。年配者は阿賀野川に排出されたメチル水銀が原因であるとご存知の方も多いのですが、一方で農薬水銀が原因であると誤解している人も少なくありませんでした。

特徴的なのは、一般的に被害者は可哀そうだと口にする人も、自分の顔見知りには疑いの目を向ける場面が少なからずあったことです。関係が遠いほど公害の被害に理解を

公書問題と距離を置いたのは、人それぞれ理由があるのだと分かりました。象徴的なのが、当初「新潟水俣病の話は語らない」と念押しされた方々が、話が弾むにつれ、むしろ積極的に語ってくれたこと。これまで影の側面に偏った見方が支配的で、今まで話す機会もなく、話を聞いて

てくれる人もいなかったためです。そして、その中から提案された「光と影」という視点こそ、FM事業では地域再生に不可欠な姿勢と捉え、作品づくりや事業を進める際の方針としてきました。

誰もが流域の現状を憂える

「公害があったため、鹿瀬出身の若い世代には、故郷に自信が持てない者もいる」
「新潟水俣病のことはあまり語りたくないが、地域が疲弊した現状は何とかがしたい」
「大河の恵みで育った農産物を、阿賀野川ブランドで売り出したい。しかし現状では難しい」

地域経済が低迷し日々の暮らしも大変な流域の人々と、新潟水俣病の地域再生を目指すFM事業との接点は、正直なところ見出しづらいです。そんな中、多くの方々が共通して「疲弊した流域の現状を憂えていた」のが印象的でした。さらに何人かは、新潟水俣病に向き合えないため、誇るべき地域の宝ももんで隠さざるを得ない落胆を吐露してくれました。
恐らくその部分が、流域に生きる人々とFM事業とに通ずる接点となり、それをどう広げていくかが、今後の両者の課題となるでしょう。

ツアー② 風に育まれ、土を育む酪農

～安全安心・資源循環を目指す

神田酪農

阿賀野市六野瀬331 TEL.0250-68-4652

酪農にいがた農業協同組合阿賀野支所(※旧下越酪農)

阿賀野市六野瀬607 TEL.0250-68-2106



ホットミルクを試飲・・・美味しい!

神田酪農代表の神田豊広さん

衛生管理が行き届いた清潔な牛舎

旗野美乃里氏(安田町誌第5号より)

「ダシの風」吹く土地で、新潟県の酪農が発祥した。明治40年頃、安田村保田の旗野美乃里氏が「ツベタ牧場」を開いたことで、安田は新潟県酪農発祥の地となり、今でも県内有数の酪農地の一つとなっています。その後、六野瀬の小野里誠助氏が近隣農家をまとめ、大正9年に組合を発足、これが下越酪農組合へと発展しました。六野瀬は阿賀野川から吹く強風「ダシの風」の影響で、野菜や果樹栽培に向かなかつたため、結果として酪農が盛んになりました。現在は全国的に牛乳の消費量が落ち込む中、同組合で生産された生乳は、地域ブランドとして名高い「ヤスタヨーグルト」へ優先的に出荷、地産地消もされています。

酪農にかける熱意が独自の色を生み出す

●神田酪農は、HACCPという高度な衛生管理手法を応用した農場として認定され、牛舎内は非常に清潔ですが、それを維持する努力は並大抵ではありません。そこまで手をかけ大切に生産した生乳だからこそ、その一部を自家製ブランド「やさだ愛情牛乳」「白鳥の翼」として独自に販売し、安全安心・高品質が評価されています。

●また、酪農を通じた人との交流を大切にしたいとの思いから、牛舎見学や酪農体験の受入れも積極的に行っています。六野瀬における組合結成から90年余り、酪農への熱意は脈々と受け継がれ、独自の発展をとげています。

地球に優しい焼き物づくりを目指して

●安田では、焼き物に適した粘土が豊富に採れたため、すでに江戸時代から窯業が始まっています。

●この窯業の象徴である煙突が目印の小田製陶所では、明治の頃から一貫して、土の焼き物にこだわった製品を開発してきました。現在の主力は、田畑の土壌環境を良くする「暗渠排水土管」です。

●この素焼土管は吸水力に優れ、抜群の耐久性を誇り、そして何より環境に優しいのですが近年の主流は、プラスチック管などの安価な化学製品なのだそうです。

これからの環境学習に最適な“土へと還る旅”

●小田製陶所の見学コースは実に面白かったです。完成品からスタートし、焼く前の乾燥土管の成形、原料の粘土と、年代を重ねた建屋の中を、製造工程を遡って案内されます。まさに「土へと還る旅」が体験できました。

●化学製品に押され気味ですが、まだ若い代表の小田正雄さんは、安田瓦や土管の廃材を活用した舗装材「やきもの散歩道」など、廃材を再利用し焼き物の特性を活かした製品の開発に余念がありません。環境に優しい焼き物づくりという理念と、時代の隠れたニーズをどうマッチさせるかが、今後の鍵を握るようです。

●小田製陶所の挑戦は、これほど環境の重要性が叫ばれる社会において、環境に配慮された商品がなぜなかなか広まらないのか、どうすればそれは広まるのか…などを深く考え、きっかけを私たちに与えてくれます。

乳牛の排泄物を良質な堆肥へ…酪農発祥の地の資源循環

●酪農家から出た乳牛の排泄物は、以前は環境汚染源と見られた時期もありました。酪農にいがた農業協同組合が管理運営する阿賀野市グリーンアクアセンターではそれらを利用して、良質な有機質肥料「阿賀のたいひ」を製造・販売しており、近隣からの評判も上々です。

●酪農発祥の地ならではのこの取組は、とても重要な意味を持つように感じられました。一つは食と大地の間で資源がうまく循環している点で、前出の神田酪農でも、この堆肥を乳牛の自給飼料の生産に使っているそうです。

●もう一つは、かつて新潟水俣病による環境汚染と健康被害が広まったこの阿賀野川流域で、地域の独自性を活かして資源循環を持続可能にしている点であり、全国の人々に胸を張って誇っても良いと感じました。



阿賀野市グリーンアクアセンター

次号では、石材・安田瓦などを特集予定です!

中流地場産業をテーマとした地域再発見講座を開催します! 詳しくは8ページ参照

(カラー写真撮影:山口冬人氏 ほか)



「阿賀のたいひ」として出荷



製造された堆肥を乾燥中



代表の小田正雄さん



貯蔵された安田の良質な粘土



成形直後の湯気のたつ土管



出荷を待つ土管の山

阿賀野川中流域地場産業ツアー ★体験レポート～大地との絆を紡ぐ

平成22年度は阿賀野川中流域・安田の地場産業を中心に「ロバダン!」を展開しました。安田は「草水石材」「安田瓦など窯業」「酪農」「砂利採取」など…阿賀野川の風土と歴史が生み出した、特色ある地場産業の宝庫。その熟練した職人たちから語られる話は大変興味深く、これからの時代の地域のあり方を探るヒントに満ちていましたので、皆さんにお願いして、安田の地場産業を見学させていただくツアーを敢行しました!

うす高く積まれた陶製管 (写真提供:小田製陶所)



その後修繕し今も現役で活躍中



新潟地震直後のひび割れた煙突 (写真提供:小田製陶所)

ツアー① 土と共に生きる窯業

～環境に配慮した製品への徹底したこだわり

(有)小田製陶所

阿賀野市六野瀬2312 TEL.0250-68-3432

地球に優しい焼き物づくりを目指して

●安田では、焼き物に適した粘土が豊富に採れたため、すでに江戸時代から窯業が始まっています。

●この窯業の象徴である煙突が目印の小田製陶所では、明治の頃から一貫して、土の焼き物にこだわった製品を開発してきました。現在の主力は、田畑の土壌環境を良くする「暗渠排水土管」です。

●この素焼土管は吸水力に優れ、抜群の耐久性を誇り、そして何より環境に優しいのですが近年の主流は、プラスチック管などの安価な化学製品なのだそうです。

これからの環境学習に最適な“土へと還る旅”

●小田製陶所の見学コースは実に面白かったです。完成品からスタートし、焼く前の乾燥土管の成形、原料の粘土と、年代を重ねた建屋の中を、製造工程を遡って案内されます。まさに「土へと還る旅」が体験できました。

●化学製品に押され気味ですが、まだ若い代表の小田正雄さんは、安田瓦や土管の廃材を活用した舗装材「やきもの散歩道」など、廃材を再利用し焼き物の特性を活かした製品の開発に余念がありません。環境に優しい焼き物づくりという理念と、時代の隠れたニーズをどうマッチさせるかが、今後の鍵を握るようです。

●小田製陶所の挑戦は、これほど環境の重要性が叫ばれる社会において、環境に配慮された商品がなぜなかなか広まらないのか、どうすればそれは広まるのか…などを深く考え、きっかけを私たちに与えてくれます。

阿賀の宝もん☆発掘コラム

阿賀野川の歴史や文化、人や暮らし、自然環境…などを一歩深く探る各種コラムを毎月連載。

映画「阿賀に生きる」に登場した人々が体現する考え方や流域文化、報道などから伝わらない「それぞれの新潟水俣病」、「阿賀の宝もん」と地球環境問題をつなぐと見える流域の未来…など各種コラムを通して、新潟水俣病に向き合い乗り越える流域づくりのヒントを発掘していきます！

※短期集中連載コラム「『阿賀の宝もん』から考える地球環境問題」(第2回)は次号掲載します。



左:五泉市に広がる里芋畑 右:里芋「帛(きぬ)乙女」(写真提供:中村吉則氏)



連載コラム

第2回

映画「阿賀に生きる」とその周辺の人々

新潟水俣病の舞台ともなった阿賀野川流域に暮らす人々を、3年かけて記録したエンターテインメントドキュメンタリー映画「阿賀に生きる」(1992年、製作:阿賀に生きる製作委員会、監督:佐藤真)。阿賀野川流域に生きる人々の中に刻み込まれた歴史や文化を、映画の登場人物など関係者の紹介を通じて発信するコラム。

FM事業ワーキングチームメンバー:旗野 秀人

1950年生まれ。阿賀野市(旧安田町)在住。旗野住研取締役専務。映画「阿賀に生きる」の仕掛け人にして、新潟水俣病安田患者の会事務局も務め、冥土のみやげ企画を主宰する。

「手踊り」だと言っている。笑っていた。そう言えば「阿賀に生きる」の中で安田町水俣病未認定患者の会(当時)の総会が終わって、みんな「団結、ガンパロウ」をやるのだが、たつたひとりヨシノさんだけが、ゲーではなくてパーを出している。私が好きな場面のひとつだ。この映画を見た人で気づかれた方はあっただろうか。私も初めのうちは見逃していたのだが、見つけたときのあの嬉しかったこと！その音頭をとる副会長の勇さんは「国を突きあげろー！」などと勇ましい言葉を吐くのだが、なぜか笑っていた。二次訴訟の真只中なのにみんな実に楽しそう。そして最後の落ちは「フィルムが無くなりました！」と小林カメラマンの大声と共に画面が真っ黒になってしまい、再び同じことを繰り返して大爆笑となる。裁判が始まって5年ほど経った頃の撮影だから20年余り前のことになる。

総勢18名の仲間

文字さんや新美さんがずい

20余年前の集合写真

団結、ガンパロウ

ぶん若い、50歳後半だったろうか。撮影スタッフの合宿所「阿賀の家」を貸してくれた盛雄さんに最年長の七太郎さん、いずれもご存命であれば百歳は超えている。川舟の船頭仲間のまとめ役で運動の始まりをつくった栄作さん、地元小学校で最初に出前授業で語ってくれた清吉さんも船頭だった。地藏祭りの日、老人車を押して虫地藏に花を一輪手向けるシーンで登場するキサさん。子どもの健康を気遣い、学校給食に無農薬野菜を仲間たちと提供していた信さん。キヨノさんにサキさんにトメさん、キヨミさんは明治生まれの乙女たち。そして、キミイさんにハツミさんに貞さん、キヨさんと、いずれも生まれも育ちも生粋の川筋もんの総勢18名。みんなとってもいい顔して写っている。

寂しくなった会だ：

1992年、二次訴訟判決の日「これでようやくニセ患者の汚名が晴れて、胸を張って村に帰れる」と、喜んでいた栄作さんはその春に完成した「阿賀に生きる」をみんなと観て間もなく逝った。栄作さんと同級の勇さんは大の仲良しで、いつも二人三脚で会を



連載コラム

第2回

それぞれの新潟水俣病

新潟水俣病に向き合い、それを乗り越える流域づくりを目ざして始まった「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」。このコラムでは、これまであまり伝えられてこなかった、新潟水俣病に対する流域の人たちのさまざまな思いや動きを伝えていきます。無関心だったり中傷したりするのではなく、お互いの状況を知り、わかり合うために。

FM事業ワーキングチームメンバー:里村 洋子

1946年生まれ。新潟市北区(旧豊栄市)在住。「農民文学」会員。

「阿賀野川ブランド」への憧憬

洪水とツツガムシ

「水との闘いだっただわね」阿賀野川中流域・五泉市の農家を訪ねると、きまってるこのことが話題にのぼる。「川が暴れるたびに田畑があっちへ行ったりこっちへ行ったり」。早出川と合流するあたりが特にひどかったという。もう一つ、よく出るのがツツガムシの話だ。川原で刈った草を背負って帰る時に首を刺さ

れる。「高熱が出るのでツツガムシだな、死の宣告が出たなど覚悟した」そうだ。流域には亡くなった人を祀る虫地藏が多く見られる。

新潟水俣病へのとまどい

こんな風に、洪水の歴史や風土病と怖れられたツツガムシについては、資料を持ち出し、先祖がいかに苦闘したか、熱心に話してくれる五泉の人たちが、新潟水俣病の話になると、大方がとまどいを見せる。「洪水もムシも昔のことだけど、水俣病は今も続いているから、遠慮してしまふんさ」

「あのシヨ(衆)、どうみても水俣病だかと思う人もいた。そんな人が集落に5、6人でもいれば固まって申請できたら、応援の仕様もあったら、ぼつりぼつりでは、ねえ」

「五泉から昭和電工に通っていた人も大勢いたし。なかなか話にくい話だわね」

里芋のブランド化

とまどいは、里芋産地として売り出すことになった時でも大きかった。新潟水俣病公式発表から5年後の昭和45年、五泉市は減反対策として本格的な里芋栽培に取り組みことにした。阿賀野川が運んできた肥沃な土壌がおいしい里芋作りに適していたこともあり、「帛(き

ぬ)乙女」の名で今では全国有数の特産地となっている。

その里芋に本当は「阿賀野川」という名もつけたかったと栽培農家は打ち明ける。暴れた風土病をもたらしはしたものの、先祖代々、川で漁をし、川で遊び、川の四季に親しんできた。「俺らにとっては大事な阿賀野川なんさ。その名前への憧れはあるわね」。

負のイメージをどう乗り越えるか

しかし、阿賀野川「新潟水俣病の懸念から風評被害を心配し、里芋に「阿賀野川」の文字を入れるのは残念ながらあきらめることにした。同じような話は旧豊栄市の米作り農家や松浜の漁師からも聞いた。「阿賀野川米」「阿賀野川の鮭」としたいが、売れなくなる」と困るといふものである。こうした負のイメージをどう乗り越え、流域産業の活性化につなげるか。

被害者の尊厳と医療を補償し、今はすっかりきれいななった阿賀野川の環境を守り続けるためにも、流域住民みんなが集まって「オメさんも大変だね」とそれぞれの立場をねぎらい合いながら、阿賀野川の恵みを一緒に食する「阿賀野川感謝祭」開催の光景をふと思ひ浮べた。